

参加の動機

私は国語科の教員を志望しています。「文章の解釈や考え方は人によって違う」と実感することが、国語のおもしろさだと思っています。授業づくりのために教材研究を行っていく中で、そのような「読みの違い」を引き出すには、教材を読んだ後により問いを子どもたちに投げかけることが効果的だと思いました。そこで、よい問いをいかにしてつくるか、まずは自分が学んでみたいと思ったことが大きな理由です。

講座を通して学んだこと、自身の変化

国語科の授業と質問づくりの理論は相性がよく、子どもたちの思考を活性化できる学びに深くつながることを学びました。例えば、「主人公がこの行動を起こした理由は何か」という問いだけでも、子どもたち一人一人はまったく異なる観点から考えを生み出します。そうして考えた自分の意見を他社と比較・検討し、よりよく磨き上げていく学習は、まさにいま盛んに議論されている対話的な学びであると思います。

何より、自分なりに問いを立て、答えを出すという学習プロセスは、子どもたちにとって魅力的に映ると思います。学習者が楽しいと思える授業は、子どもたちが自然に主体性を身につける一助にもなるのではないのでしょうか。

私自身の変化としては、優れた問いは必ずしも1人でつくる必要はないと気付けた点です。ブレインストーミングのように、複数人でアイデアを出し合うことも手立てのひとつと学びました。「自分なりに問いを出すこと」に固執しすぎない、視野の広さも持てるようになりました。

今後やってみたいこと

10月に教育実習があるので、授業の中で質問づくりの時間を取り入れたいです。また、レポートや卒業論文を書く際の起点として、質問づくりのステップを活用したいです。

その他、感想など

私自身、高校生までの国語の授業では「与えられた問いに答える力」をつけてきました。しかし社会人には「自分なりに疑問を持ち、自分で答えを出す力」が求められることを、大学生になってから知りました。小中高での学びと、いま社会に求められている学びがつながっていないことに違和感を覚えています。そのようなずれを少しでもなくすために、子どもたちに主体性が身につくような授業を実践していきたいと思っています。